

群 教 セ	G09 - 02
	平 27. 257 集
	英語一中

# 読み手を意識した、まとまりのある 英文を書くことができる生徒の育成

— 伝える内容を充実させ、ペアやグループで

読み合い見直す活動を通して—

特別研修員 大澤 宏美

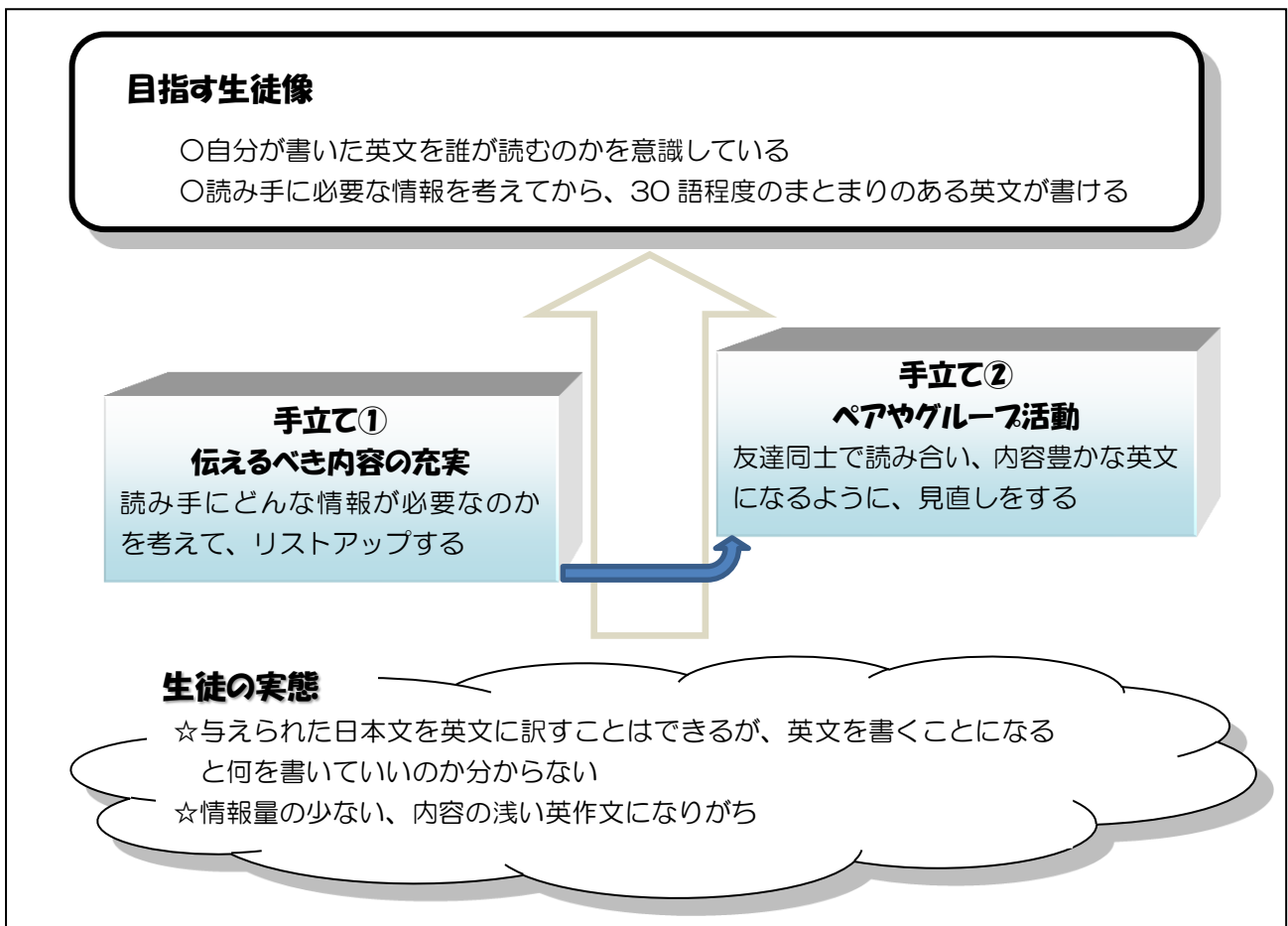
## I 研究テーマ設定の理由

「はばたく群馬の指導プラン」では、「外国語の課題と、解決に向けて伸ばしたい資質・能力」の中で、「まとまりのある文を正しい英語で書くこと」が課題であり、その課題を解決するためには、「身近な話題や自分の考えなどについてまとまりのある一貫した英文を書くことができる」力が必要であるとされている。本校の実態を見ても課題は同様であり、生徒の英文を書く力を伸ばす授業にする必要がある。

まとまりのある英文を書く際には、まず読み手を想定して「何を知らしてもらいたいのか、何が知りたそうか」というポイントを整理することで、生徒は書く内容を考えやすくなるのではないかと考えた。書くべき事柄を生徒自身が考え精査することで、英文作りが主体的な取組となる。また、友達同士で読み合う場面を設定し、良いところを見付けたり、もっと詳しく知りたいと思うところを書き加えるよう助言したりする活動も取り入れることで、英文の内容がより豊かになると考える。担当する2学年では、30語程度のまとまりのある英文を書くことを目標とする。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手立て

### (1) 読み手に伝えるべき内容の充実

英文を書くことに対して、意欲的な生徒は多く見られる。与えられた日本語を英文にすることも授業中の演習等により慣れ親しんでおり、あまり抵抗はないように思われる。ただ、あるテーマに沿って英文を書く活動を設定すると、生徒は何から書き始めていいのかわかってしまう。書くことはできたとしても、“I went to Oze.” や “I had lunch.” といった単純な事実の羅列に留まっている。また、段落を構成する際に用いる既習の接続詞や副詞を効果的に取り入れることができる生徒は数少ない。

まず、書きたい項目をリストアップさせる。ここで書くべき事柄を深く考えることがその後の英文作りや読み合う活動に繋がるので、生徒の考える時間を十分確保する。「いつ」「どこで」「誰と」「どうやって」など、既習事項を使えば英文を構成できることを理解させ、自信を持たせたい。

また、内容に一貫性を持たせるために、接続詞や副詞の用法について確認する。具体的な用例を紹介して文と文の繋がりに注意することの重要性を生徒に実感させたい。

### (2) 内容豊かな英文を書くためのペアやグループ活動

書いた英文を友達同士で読み合う場面を設定し、良いところを見付けたり、もっと詳しく知りたいと思うところを書き加えられるようにしたりする活動を取り入れていく。そうすることで、英文がより豊かな内容となると考えられる。

ペアやグループで読み手の心情を考えながら下書きを読み合い、更に内容を深めるため簡単な助言・添削を行い、友達の英文作りに協力する。学校行事において同じ班で行動するなど話題を共有できるメンバー編制を行い、グループワークを活性化させる。リストアップされた情報を見ながら、英文を書いた生徒自身が修正したり付け加えたりできる事柄を考える。

どの種類の文にどんな事柄を加えると内容豊かでまとまりのある文章になるのか、生徒が気づきやすいように工夫する。プレゼンテーションソフトを活用し、具体的に文章を修正する場面を生徒に示す。

生徒の英作文の改善例をいくつか書画カメラで投影してクラス全体で共有し、具体的にどの部分が良いのかを指摘し、一人一人に良い点に気付かせたところで自分の英文に取り入れさせる。

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 成果

- どのようなことを書けばいいのかわかりやすく協力して考えてリストアップすることで、英作文への取組の質が向上した。「…（場所）に～（建物）がある」といった事実詳しい情報を付け加えたり、「そこで～することができます」と読み手がその場所を訪れたいという表現を入れたりするようになった。多くの生徒が一つのテーマに対して 30 語以上の英文を書くことができるようになった。
- 友達の英文を読んで参考にすることで、様々な表現を身に付け、自分の英作文に生かすことができた。自分一人では気付かない「書くべきこと」を友達に助言してもらったことで、新たな視点を獲得することができ、より多くの英文を書くことができた。また、文法の間違いに気づき、訂正することもできた。
- 相手意識を持ち続けることでコミュニケーションの意欲が向上し、「こんな情報を相手に知ってもらいたい」という気持ちで英作文に取り組むことができた。目上の人には表現を丁寧に、友達には視線を同じにするなど表現を使い分ける生徒もいた。

### 2 課題

- 班編制には配慮が必要である。友達の英文を読んでも内容をつかめない生徒や、書き足すことが思いつかない生徒もいた。接続詞や副詞については、教師の説明の後でも戸惑っている生徒も見られた。生徒一人一人の個性を把握し、活動を円滑に進める手腕のある生徒や、英語が苦手な生徒を支援できる生徒を各班に配置することで、より効果的なグループ活動にする必要がある。

## <授業実践>

### 実践 1

#### 1 単元名 「Writing Plus2 メール 気軽なメッセージを書こう」 (第2学年・1学期)

#### 2 本単元及び本時について

本単元は、学校を休んださくらにケビンが送ったメールが示されている。メールは、「はじめのあいさつ」「本文」「終わりのあいさつ」「署名」と構成が分かりやすく提示されているので、生徒にとってまとまりのある英文を書く上で参考になる。利用可能な表現は例文として教科書の Tool Box 中に記載があるので、それを活用してメール作成を体験することができる。生徒はフル・ブロック・スタイルというメール特有の形式や慣用表現、絵文字、略号の使い方など文化的な特徴に気付き、メールを書くための簡単なルールに習熟できる。メールのテーマは生徒に身近なものがよいと考え、経験したばかりの職場体験とした。送る相手は昨年度までお世話になっていた先生とし、相手意識を持てるように配慮した。これにより、生徒が意欲的に取り組んだり、伝えたいことを具体的に考えたりすることができる考えた。

第1時では教科書の本文を読み、メールの内容を理解する。メール特有の形式についてもここで知る。第2時では、読み手に伝えたい事柄のリストを全体で確認してから、各自で下書きを作成する。本時である第3時では前時のリストを再確認してから、ペアで下書きを読み合う活動を行う。その後、自分のメールを仕上げる。

#### 3 授業の実際

##### (1) 読み手に伝えるべき内容の充実

読み手(異動した先生)は本校の行事について熟知しており、職場体験にまつわる経緯等を詳しく伝える必要はない。そのため、仕事の具体的な内容や体験を通して学んだことなど伝えたいことを互いに出し合っ、事前にリストアップしてから英文を書き始めた。感想も「楽しかった」や「疲れた」だけでなく、具体的にどんなことが楽しかったり、どんなことが大変疲れたりしたのか、といったことをリストアップした。一緒に行ったメンバーや、その事業所に行って初めて知ったこと、具体的な仕事の内容、1日の仕事の流れなど、できる限りたくさんリストを作った。

##### 【リスト】

- ・職業体験をした事業所等
- ・仕事の内容
- ・所感
- ・大変だったこと
- ・事業所に行って初めて知ったこと
- ・働いた時間
- ・一緒に行った友達

##### (2) 内容豊かな英文を書くためのペア活動やグループ活動

リストを基にまず下書きに取り組み、その後ペア活動に移行した。下書きを始める際に、書画カメラでモデルのメールを確認した。次に、隣の生徒と英文メールの下書きを交換して読み合った(図1)。情報が不足している部分やもっと詳しく書いた方がよい事柄などを書き手に伝え、書き手は教師の用意したワークシートにそれらをメモした。メモには内容のことだけでなく、文の構成についても書き留めるよう支援した(次頁図2)。読み終わったらペアを替えて同じことを行った。どのような視点で友達の下書きを読んだら良いのか分からない生徒には、黒板に読み合う視点を書いておいて、いつでも見られるようにした。



図1 ペアで内容を確認

生徒はワークシートのメモを基にメールを仕上げる事ができた。具体的には、動物園に行った生徒は、様々な動物の名前を挙げて説明したり、これまで慣れてきたI以外の主語(theyなど)を使うようになったり、SoやButといったつなぎ言葉を用いたりするようになった(図3)。英文を書くことに苦労している生徒もいたが、ALTと協同して対応した。また、必要に応じて黒板にヒントを書きクラス全体で確認した。仕上がった文を全体で共有するために、何人かのワークシートを書画カメラでスクリー

ンに映した。どこが良いのかを生徒に探させて、良さに気付いた生徒は、自分の英文に取り入れてもよ  
いと促した。

仕上がったワークシートは異動した先生に送った。そのことは生徒のモチベーションにも繋がった。

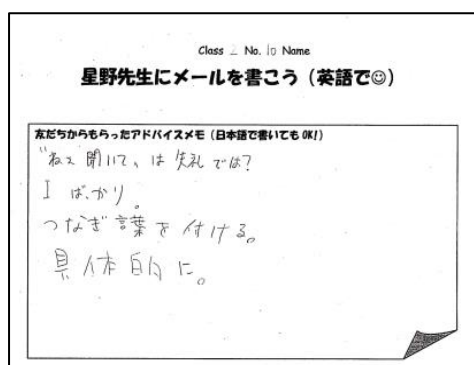


図2 ワークシート (上部)

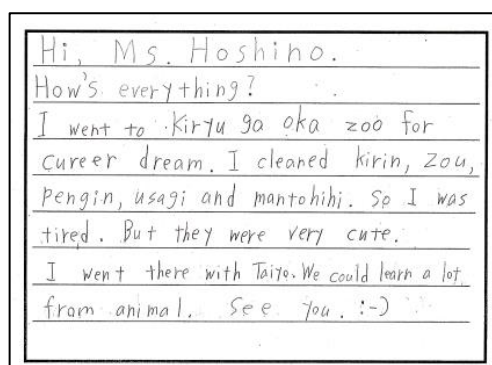


図3 ワークシート (下部)

#### 4 考察

##### (1) 「読み手に伝えるべき内容を精選して英文を書かせる」という手立てについて

生徒は読み手が誰であるのかを意識しながら、その読み手に伝えるべき情報と敢えて伝える必要のない情報の整理ができていた。しかし、実際に英文を書く段階になって生徒の様子を見てみると、「職場で体験したこと」や「体験後の職業観」など積極的にリストに挙げた項目について、1文程度しか書けない生徒がほとんどであり、まとまりのある英文とは程遠い結果となった。小学校で職業体験を行った生徒は、「体験したこと」について“I taught kanji.”と書くだけで終わった。実際には給食を一緒に食べたり、休み時間に遊んだり、宿題を見てあげたりしたにもかかわらず、そういった言及はなかった。以上のことから次のような改善策を考えた。内容は深くなくとも、あるいは文と文との結束性に留意できなくとも、まずは「一つの項目に対して、3文以上書く」という指示をする。

英文らしい英文を作ることも大切だが、何らかの成就感・達成感を味わわせることも学習意欲の継続になると思われる。内容を充実させるために情報を複数盛り込むことを基本とし、更に接続詞や副詞を使用することで読み手に行間を読ませたり簡単に内容をつかませたりするのに有効であると気付かせたい。また、平叙文だけでなく疑問文の効果的な使用も紹介しておけば、変化に富んだ英文作りができると思われる。

##### (2) 「内容豊かな英文作りをするためのペアやグループ活動」について

ペアを途中で変えて二人で読み合うという形を採用したが、下書きを読んでも自分の英語が相手に伝わっているのかわからず戸惑う生徒の様子が見られた。同年代の生徒に「アドバイスをする」というのは生徒にとって難しく、当たり障りのないやりとりになってしまう。そこで次のような改善策を考えた。ペアではなく、グループでシェアするという形にして、肯定的に友達の作品を評価させたり、下位の生徒にも語数のチェックなど役割を持たせたりするなど活動を取り入れる。

導入の段階で示した見直す前の例文と見直した後の例文は同時には見せなかったため、生徒がどの部分が変わったのかを比較することができなかった。そこで、次のような改善策を考えた。見直す前の文と後の文を並べて提示して、生徒が変わった部分を認識し、友達同士で読み合う活動に役立てられるようにする。

##### (3) 友達に伝える内容について

ALT とのモデル会話を示したときに、内容のことだけでなく、表現の仕方についても触れたために、生徒の注意が散漫になってしまった。そこで、次のような改善策を考えた。「伝えるポイントは内容」に絞る。教師の指導・助言も奏功し、生徒が仕上げた英文は30語を超えるものがほとんどであり、まとまりのある英文としては十分であると思われる。友達の下書きを読んで、その内容を更に豊かにするためのポイントに自然に気付くことができるよう支援するのが今後の課題である。

## 実践 2

### 1 単元名 「Multi Plus 2 町紹介」 (第2学年・2学期)

#### 2 本単元及び本時について

本題材は、自分が住んでいる町を外国の友達に紹介するという自己表現活動を取り扱っている。住んでいる町の名前やその町の位置、その町では何が有名なのかを述べる表現を身に付けることができる。この単元では、所属校のALTと関係のあるオーストラリアの中高生を読み手と想定し、実際の学校行事である東京校外学習で訪れた場所について紹介する内容とした。「もしオーストラリアの生徒が日本に来るときには是非参考にしてほしい」という思いを持って書く活動を行う。読み手が外国の生徒ということで、英語を書く必然性が生まれ、内容もより現実的なものになることが期待される。

第1時では、教科書の本文にある町紹介の内容を理解し、方向や位置を示す表現の仕方を知る。第2時では読み手に伝えたい事柄を全体で確認してから下書きを書く。本時である第3時では、前時の伝えたい事柄を再確認してから、グループで下書きを読み合う活動を行う。その後、仕上げの英文を書く。

#### 3 授業の実際

##### (1) 読み手に伝えるべき内容の充実に関して

読み手が求めている情報をより現実的に知りたいと考え、事前にALTを介してオーストラリアの生徒から「知りたいこと」を聞いておき、それを生徒に伝えた。さらにオーストラリアの生徒がもし日本に来るときがあったら、「ここに行きたい」と思ってもらえるように、魅力を伝えるように指示をした。例えば「駅から近い」「歩いて～分」という交通の便の良さや、その場所の有名な食べ物、お土産など、書くべき事柄のリストアップをさせた。その際、ヒントとして英訳を付けておいた。前回の反省点として「友達の英文を読んでも、他にどのような英文が必要なのか分からない」という生徒がいたので、読み手が必要としている情報をより具体的に提示した。また、「浅草寺」「スカイツリー」「もんじゃ焼き」といった言葉は、それが一体何なのかオーストラリアの生徒に伝わらないので、分かりやすく説明するように指示をした。

##### 【リスト】

- ・所在地や近隣の情報 (～の近く near～/地名/駅名など)
- ・名称 (店 shop 建物 building 公園 park など) ・お土産 souvenir
- ・費用・料金 (無料 free・有料【料金】 など)
- ・特徴 (新しい new 歴史がある old 広い large など)
- ・具体的な数字 (高さ～meters high/歩いて～分 It takes～minutes on foot.  
～円 It costs～yen. 広さ～㎡ ～年前に作られた It was made in～. など)
- ・そこでどんなことができるか We can～ (買う buy/食べる have/見る see など)
- ・そこは何で有名なのか It is famous for～など

##### (2) 内容豊かな英文を書くためのペアやグループ活動に関して

下書きをもとに、校外学習のときのメンバーでグループを作り、読み合って見直しをした。ALTとのやり取りを通して下書きをどう読むか、またプレゼンテーションソフトを用いて具体的にどう文や語句が増えていくのかということを示した(図4)。下書きのノートとワークシートを順に回して、「オーストラリアの生徒が知りたいこと」のリストを見ながら、下書きにどんな文や語句が足せるのかを考えさせた(次頁図5)。友達の下書きを興味深く読む様子も見られた(次頁図6)。各グループは同じ場所に行ったメンバーであり、話題について共通認識を持ち皆で取り組むことができた。どんな文を書き加えたらいいのかわからないという意見はなく、活動に積極的に取り組む姿が見られた。



図4 英文を豊かな内容にするための取組



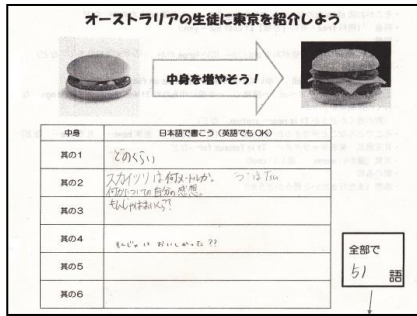


図5 友達からのメモ



図6 グループでの見直し

仕上げの英文を書く際に、文を増やす前と後との英文を比較できるように並べて提示した(図7)。グループで回覧したワークシートが手元に戻ってきてからは、ノートに書いた下書き(図8)を基に仕上げに取りかかった。日本語のメモを見て英文することに苦労している生徒もいたが、それぞれが目的意識を持って書くことができていた。例えば、メモを基にスカイツリーの具体的な高さを入れたり、パンダを見た感想を表わす文が増やしたりした。その他にも There is two pandas. という間違いを There are two pandas. と直すこともあった(図9)。語数も30語を超える生徒がほとんどであった。また、仕上げる際には文を足すだけでなく、It is a tower. → It is a *very new* tower. のように語句を足してもよいと伝えた。仕上げの文で、参考となるものは書画カメラを使い、全体で良いところを確認した。

生徒の紹介文は、オーストラリアの学校へ送った。

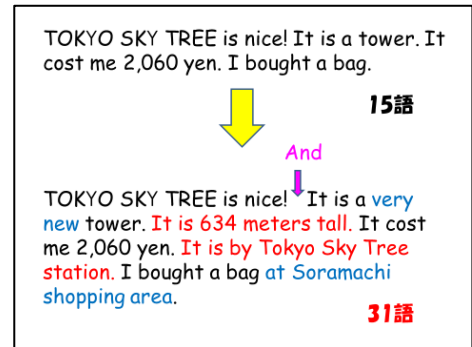


図7 英文の比較

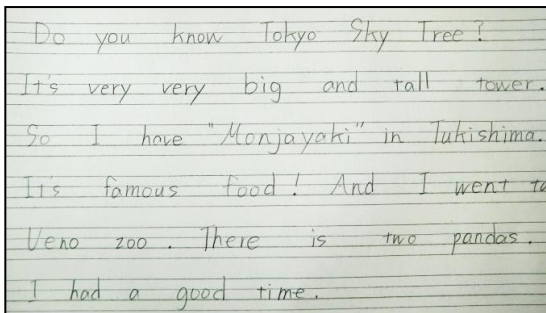


図8 下書き

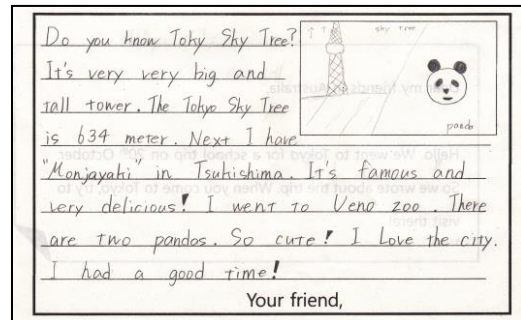


図9 仕上げの文

#### 4 考察

##### (1) 「読み手に伝えるべき内容を精選して英文を書かせる」という手立てについて

生徒はいくつか項目を立てることができたが、こちらが期待していた内容が出なかったため、伝える情報の項目を細かく提案する必要があった。生徒はその提案を基に「駅の近くかどうか」「駅から歩いて何分か」「高さや値段といった具体的な数字」「目玉商品や有名なキャラクター」などを伝えるべきリストに加えていった。読み手を想定しても、伝える内容を具体的に考えることは容易ではない。そこで、次のような改善策を考えた。日頃から相手に詳しく伝えるための英文作りに取り組んだり、「いつ」「どこで」「何を」といった語句を英文に取り入れる習慣を身に付けたりする機会を設けることが必要である。書くべき事柄が分かれば生徒はまとまりのある英文作りに取り組むやすい。

##### (2) 「内容豊かな英文作りをするためのペアやグループ活動」について

校外学習での班をそのまま英文を見直すグループとしたので、意見交換がしやすく、中身を増やすためのメモも書きやすかったようである。グループ内で順に下書きを回すことで、少しずつメモが増えた。また、多くの下書きを目にすることで、自分の英文作りに参考になる点も発見でき、メモにない英文を書き足すこともできていた。仕上がった英文を、書画カメラを用いて全体で見て良い点を確認することも効果的であった。ペアやグループでの英文作りを何度も積み重ねていくことにより、生徒が読み手とのコミュニケーションを意識して、まとまりのある英文を書くことができる。